

略年譜



《自画像》
1887年、油彩/厚紙、41×33cm
ファン・ゴッホ美術館
(フィンセント・ファン・ゴッホ財団)

1853

3月30日、フィンセント・ウィレム・ファン・ゴッホ、オランダ南部ノールト・ブラバント地方のフロート・ズンデルトに生まれる。父はリーフェント・テオドルス・ファン・ゴッホ(1822-1885)、母はアンナ・コルネリア・ファン・ゴッホ=カルベントゥス(1819-1907)。父は牧師であった。フィンセントは長男で、ふたりの弟と3人の妹がその後誕生した。

1857

5月1日、弟テオドルス(愛称テオ)生まれる。

1861

1月から約1年間、フロート・ズンデルトの小学校に通う。

1864

フロート・ズンデルトから北へ20キロあまりの町ゼーフェンベルゲンの寄宿学校に入学する(1866年8月まで)。

1866

ティルブルフの国立ウィレム2世中等学校に入学(1868年3月に中退)。

1869

美術商ゲーピル商会のハーグ支店に見習いとして勤める。ゲーピル商会が販売していた写真や版画の収集を始める。

1872

9月、現存するテオ宛の最初の手紙が書かれ、生涯にわたる文通が始まる。

1873

パリに短期間滞在した後、ゲーピル商会ロンドン支店で勤務を始める。下宿先の娘ウージェニーに思いを寄せるが失恋。強い精神的打撃を受ける。

1875

ゲーピル商会パリ本店に勤務となるが、周囲との関係がうまくいかず、1年足らずで辞職。両親が住むエッテンに戻る。

1876

イギリス南端の町、ラムズゲイトの学校で語学教師として勤務する。

1877

大学で神学を学ぶためにアムステルダムに移住。しかし翌年には入学を断念し、エッテンに帰郷する。

1878

ベルギーのポリナージュ炭坑で献身的な伝道活動を試みる。

1880

画家となることを決意。素描を始める。

1881

ハーグに住む従兄の画家アントン・モーヴに絵の手ほどきを受ける。

1882

娼婦シーンと知り合い、同棲を始めるが翌年9月には別れる。この頃から本格的に油彩に取り組む。

1885

初期の代表作《じゃがいもを食べる人々》が完成する。

1886

3月、アントウエルベンを経てパリに移住。弟テオのアパートに転がり込む。間もなくコルモンのアトリエに通い始め、ベルナルやロートレックと知り合う。急激に色彩が明るくなっていく。

1887

この頃、浮世絵を盛んに購入し、それをカフェで展示するとともに模写も行なった。シニャックやスーラなどの友人たちとともに制作し、展覧会を企画するが、次第にパリの生活に疲れを覚える。



1888

2月、南仏アルルに移住。9月、ラマルティエヌ広場の向かいにある「黄色い家」に移る。10月、ゴッガンがアルルに到着し、「黄色い家」での共同生活が始まる。12月、ゴッガンとの確執の末、左耳の一部を切り取り、病院に収容される。ゴッガンはアルルを離れ、共同生活は僅か2カ月で終わる。

1889

4月、テオがヨハンナ・ボンゲル(愛称ヨー)と結婚する。5月、サン=レミの療養院に自ら進んで入院する。間もなくオリウの木々、糸杉、麦畑などを盛んに描く。

1890

1月、パリの雑誌『メルキュール・ド・フランス』にファン・ゴッホに関する評論が掲載される。テオに息子が誕生し、兄と同じフィンセント・ウィレムと名付けられる。5月、サン=レミの療養院を去り、パリのテオ一家を訪問した後、郊外のオーヴェール=シュル=オワーズに到着する。素人画家でもあった精神科医ポール・ガシュと意気投合する。

7月6日、パリのテオ一家を訪れるが、自分が重荷になっているのではと不安になる。

7月27日、拳銃自殺を図り、2日後の29日、パリから駆けつけたテオに看取られ死去。

1891

1月25日、テオ、ユトレヒトの病院で死去。

